

早稲田大学大学院社会科学研究科

早稲田大学審査学位論文（博士）の要旨

学位名称	博士（社会科学）
申請者氏名	趙 偉航
専攻・研究指導	地球社会論専攻 国際協力・平和構築論研究指導
論文題目	Old-timers, Newcomers, and the Borderless-Integration オールドタイマー、ニューカマー、ボーダーレス・インテグレーション
論文副題	A Research of New Chinese Immigrant in Phitsanulok Province, Northern Thailand タイ北部ピサロヌーク県における華人移民の調査

2023年1月24日

論文提出者指名： 趙偉航（早稲田大学大学院社会科学研究所後期博士課程）

英文題名：Old-timers, Newcomers, and the Borderless-Integration: A Research of New Chinese Immigrant in Phitsanulok Province, Northern Thailand

和文題名：旧移民、新移民とボーダレス統合—北部タイピサヌローク県における中国人新移民の研究—

1. 本論文の主題

(1) 研究の背景

趙偉航氏の研究は、中国の外交政策が、国家のソフトパワー強化のために、オールドタイマー（タイ国籍を持つ華人：旧移民）とニューカマー（タイ国籍を持たない中国大陸からの移民：新移民）を「華僑」として文化的かつボーダレス（脱国家的）に統合することを意図している点を、フィールドワークに基づき定性的なアプローチで検証している。

筆者の最大の論点となるボーダレス統合は、主に文化構築、教育、ソーシャルメディアの3つの側面から構成される。文化構築の側面は、ボーダレス統合の初期に国家の政策に基づいて、国務院華僑事務局（OCAO）が最初に構想したものである。教育面では、孔子学院が中国語教育に力を入れ、さらに旧移民と新移民の連帯を加速させる場として現地に設置したものである。また、ソーシャルメディアという切り口では、ソーシャルメディア、特にスマートフォンのアプリケーションを利用して新移民と国家とのつながりを強固に管理するメカニズムとして活用していると述べる。

事例研究で実施したフィールドワークでは、タイのピサヌローク県にある醒民学校（華人学校）の他、様々な対象者への聞き取り調査を実施している。これらの情報から当初は想定していなかったボーダレス統合に直面したという。つまり、大中華圏で発生した微妙な問題を避けるために、旧移民は「中立政策」をとっていたことである。その結果、新移民の関心を引くだけでなく、旧移民自らの立場も堅持することができたと指摘する。また、コミュニケーションの中核となる「関係」（ネットワーク）について、グローバルな視点からボーダレス統合との文脈で再考している。

(2) 研究の目的

すでに何百万人もの移民が国境を越え、あるいは国内を移動し、世界経済に貢献している。特に中国からの移民は、その人口が多いだけでなく、その範囲も広く、米国、欧州、アフリカ、東南アジアの至る所に定着し、コミュニティとしてのチャイナタウンをつくっている。海外に住む「中国人」には、新移民と華人（当該国の国籍を有する旧移民）の2

種類が存在する。同じ中国人といっても、移住した時期が違えば、民俗宗教、方言、概念、思想、地域文化に至るまで、大きく異なる。「中国化」政策とは、新旧の「中国人」をいかに統一化するかであり、習近平の「新時代」のビジョンの一部となっている。

本論文の事例研究であるピサヌローク県は東西と南北の経済回廊の十字路に位置し、中国、ベトナム、ミャンマー、タイを結ぶ経済の要衝として機能してきた。しかし、ピサヌロークの産業開発は依然として未開発のまま進んでいない。したがって、ビジネス目的で移住してきた中国人には、交通の便がよく、投資の可能性がある、かつ中国人が多く、同じ言語で会話ができるバンコクやチェンマイを選ぶ傾向がある。ピサヌロークの場合、少数の自費留学生や国費留学生を除けば、最も多い中国からの移民は中国語ボランティアである。実際、ピサヌローク商工会議所からの情報では、ここ数年、個人での中国人投資家は見当たらないと報告されている。

筆者は本論文のリサーチクエストとして、新移民と旧移民の「ボーダレス統合」は何によって推進されたのか。また、それがどのようなプロセスで起こってきたのかを説明することである。換言すれば、中華文化圏に存在する「関係 (Guanxi)」（人脈）、「会館 (Huiguan)」（協会）、「ボーダレス統合」（国境を越えた統合）という三つの関係がそれぞれどのような相互依存関係にあるのかを明らかにしようとする。

分析枠組み

本研究では質的研究に依拠する。なお、事例研究とするピサヌローク県における華僑研究の学術的な先行研究が限られている点から、聞き取り調査、追跡調査、参与観察、ワークショップ等への参加、またスノーボール法などを用いて最終的な研究結果を導き出している。また、基本的な統計資料としてタイ国家統計局デジタル経済社会部が2018年に発表した「ピサヌローク県統計報告書」やタイ国立ナレスワン大学学生課発行の報告書なども適宜利用している。

本論文の理論的枠組みとしては、エヴェレット・スパージョン・リー (Everett Spurgeon Lee) の「プル・アンド・プッシング理論」、ジェセフ・ナイ (Joseph S. Nye, Jr) のソフトパワー論、ベネディクト・アンダーソン (Benedict R. O' Gorman Anderson) の「想像の共同体」、カール・ドイッチュ (Karl W. Deutsch) の国民統合論を利用しており、旧移民と新移民の関係、孔子学院や華人学校 (醒民学校) の役割、ホスト国家タイとの関係などの分析を行なっている。

II. 本論文の構成

Abstract

Acknowledgements

List of Tables

List of Figures

Table of Contents

Introduction

Part 1 : The Old-timers – The Formation and Development of the Overseas Chinese Society

Chapter 1: Literature Review

1.1 International immigration: pulling and pushing factors

1.2 Soft Power

1.3 Imagined Community

Chapter 2: Chinatown – The Formation of Overseas Chinese Community

2.1 Origin: Fujian groups: 10 century – 14 century

2.2 Outlaws and trade: 15 century – 17 century

2.3 Formation: migration and trade: 17 century – 19 century

2.4 Development: The formation of Chinese society: 19 century – 1950s

2.5 Transformation and collective cognition of overseas Chinese: After 1950s

2.6 Newcomers: the new wave of migration – the 1980s ~ present

Chapter 3: The Policy Towards Overseas Chinese Affairs from the Chinese Government

3.1 The policy towards the overseas Chinese in the Qing Dynasty

3.1.1 The early and middle period of the Qing Dynasty

3.1.2 The late period of Qing Dynasty

3.2 The policy towards the overseas Chinese in the government of the Republic of China

3.2.1 The Beiyang government

3.2.2 The Nanjing government

3.3 The policy towards the overseas Chinese in Thailand after 1950s

Part 2: Newcomers – The Transition of Overseas Chinese Society

Chapter 4: The Policy of Overseas Chinese affairs after 1978

Chapter 5: The Patterns of New Chinese Immigrants

5.1 The definition, patterns, and population distribution of new Chinese immigrants

5.2 The “pushing factors” of newcomers

5.3 The “pulling factors” of newcomers

5.4 The newcomers in Thailand

5.5 The new comers and the role of Chinese Association

Chapter 6: A Fieldwork Study of New Chinese Immigrants at Phitsanulok Province in Northeast Thailand

6.1 Background and basic information of Phitsanulok Province

6.1.1 History and basic social information about Phitsanulok Province

6.1.2 China and Phitsanulok Province

6.1.3	Chinese Associations in Phitsanulok Province
6.2	The comparison between the ethnic Chinese (old-timers) and new Chinese Immigrants (newcomers)
6.2.1	The newcomers (new Chinese immigrants) in Phitsanulok
6.2.2	The old-timers (ethnic Chinese) in Phitsanulok
6.2.3	The difference between old-timers and newcomers
6.2.3-1	Religion and moral standard
6.2.3-2	Leisure time and entertainment
6.2.4	The sameness between old-timers and newcomers
6.2.4-1	Work
6.2.4-2	Investment and business
Chapter 7: The “Borderless Integration” between Newcomers and Old-timers	
7.1	The definition of “borderless integration”
7.2	Constructing the “borderless integration” In three pillars
7.2.1	Pillar 1 : culture building
7.2.2	Pillar 2 : social media
7.2.3	Pillar 3 : language education
7.3	Finding the balancing point: Xingmin school, Hong Kong, and Taiwan
Final Chapter	
Reference Page	

III. 本論文の概要

本論文は序論と終章を除いて、2部構成になっている。第1部は華僑社会の形成と発展を踏まえた旧移民の問題を扱っている。具体的に第1章では本論文で主として依拠する3つの理論的枠組みを最初に提示し、第2章では華僑社会形成の歴史的な流れを分析し、第3章で各時代の華僑政策を分析する。また、第2部では華僑社会の移行を踏まえた新移民の問題を扱っている。第4章で1978年以降の華僑政策、第5章は5節を通じて新移民の形態を分析する。第6章では事例研究としてのピサヌローク県の地政学的な位置と新旧移民の関係を分析する。第7章では筆者が最終的な分析結果となる新旧移民間の「ボーダレス統合」の問題を考察する。

Part 1 : The Old-timers – The Formation and Development of the Overseas Chinese Society

Chapter 1: Literature Review

第1章は3節構成になっている。本論文が主として依拠する3つの理論を扱っている。第1節で、移民研究で知られるリーの「プル・アンド・プッシング理論」を紹介し、移民のプロセスや移民の意思決定がいずれも移住計画に影響を及ぼす経済、政治、文化、環境

に関するものであることを紹介する。第2節では、ナイのソフトパワー論を紹介し、文化、政治的価値、外交政策に依存している点を述べる。第3節では、新移民が参加する華僑コミュニティを研究する上で役立つアンダーソンの「想像の共同体」を取り上げる。

Chapter 2: Chinatown – The Formation of Overseas Chinese Community

第2章は6節構成になっている。主に華僑の交易活動に伴う中華街形成の歴史を10世紀まで遡り時系列に追っていく。また最後の第6節では、現在までに至る新移民の移住の動向を考察する。以下第2章の概要を簡潔に述べる。

中国人の海洋活動は唐の時代に始まり、その後、北宋、南宋、元、明の時代を通じて、海上で通商が確立され、12世紀から13世紀にかけて頂点に達した。中国人が海外に移住する理由は、1つは天災、もう1つは人災であった。天災とは、自然災害のことであり、人災とは、戦争や反乱のことを指す。これら2つの理由によって、より安定した豊かな生活を求めて、多くの中国人が海外に移住するようになった。17世紀以降、現地の植民地政府も中国人を受け入れ、工業、農業、商業を発展させた。それ以降、東南アジアに中国人の移民の波が徐々に形成されていったのである。

本論文の主な研究対象はタイ（かつてのシャム）であるが、中国とタイの政治・経済関係は非常に緊密で、当時のシャム王室は、シャムの対外経済発展や貿易に重要な役割を果たした中国人実業家を重宝した。中国人の人口が海外で急増する一方で、中国文化も移民を通じて拡散し、特に福建省と広東省が血縁・同郷である同民族の文化を根付かせた。チャイナタウンは、華僑の海外定住と同時に、現地統治者が華僑の居住区を区分けした結果でもある。

冷戦時代はタイ政府が反共産主義政策を採用し、現地の華僑は中国共産党に友好的な存在とみなされたが、他方で経済的発展には中国系移民の存在は非常に重要であった。第二次世界大戦後、東南アジアの国々は独立を果たす同時に、中国政府は二重国籍政策を公式に放棄し、華僑の現地社会への帰化を奨励するようになった。しかし、タイは他の東南アジア諸国と異なり、華僑がすでに長く定住し、タイ社会への統合に成功していたので、タイへの帰化や忠誠心は主要な問題ではなかった。

本論文では主にタイの新移民を対象としているが、タイの隣国であるミャンマーやカンボジアに移住した中国人新移民の職種は実に多様であった。数億円を保有する投資家から、地下カジノを運営する犯罪者までが同時に暮らしており、彼らはすべて新移民と呼ばれた。旧移民との違いは、新移民があくまで現地でお金を稼ぐことが目的であって、現地に根を張ろうという気がない点であったと指摘する。

Chapter 3: The Policy Towards Overseas Chinese Affairs from the Chinese Government

第3章は中国の各時代の政府が実施してきた華僑政策についてである。第1節では清朝時代、第2節では中華民国時代を紹介し、第3節では1950年代以降のタイにおける華僑政策に焦点を当てて論じている。以下簡潔に第3章の概要を述べる。

清朝初期から中期にかけては中国人居住者の出入国を厳しく制限され、華僑には敵対的な態度をとっていた。次に、清末政府は、華僑を保護し管理するための領事館を設置する。華僑に対する政府の態度が大きく変わったのは、華僑がもたらす経済的貢献が認められたことからであった。また、華僑政策は、経済的・政治的な側面だけでなく、華僑を教育的に引き付け、清朝に忠誠を誓わせるという側面があった。

1912年の中華民国成立後、孫文は華僑の保護と海外での人身売買の禁止を内容とする3つの規則を公布した。1927年、蒋介石は南京で国民政府を樹立し、行政院外交部の下に華僑事務局を設置し、華僑事務を担当させた。また、華僑教育委員会を設置して華僑の教育を管理し、国民党には国民党海外工作委員会が設置された。

1950年代後半のタイの国内政治や経済発展政策、さらには中国との外交関係の影響を受け、タイ政府の対華人政策は揺れ動いた。しかし、1956年以降のタイ政府の対華人政策は概ね寛容な方向に展開し、華人の社会的地位も第二次大戦中に比べて向上した。ただ東西冷戦下のイデオロギー対立の影響で多くの東南アジア華人が犠牲となり、インドネシアでは1965年の9・30事件で多数の中国人が虐殺されるという事件もあった。

1975年以降、中国とタイの外交関係が樹立されると、タイ政府の中国人対策が柔軟になった。在タイ華僑は大きな経済的貢献を果たし、有名な企業家やビジネスマンを輩出した。1970年代半ば頃には、華僑二世がタイで生まれ、タイの教育を受け、また政治的なアイデンティティーの面でもタイ人と同一視されるようになっていった。彼らは今でも中国の伝統的な文化、習慣、作法を残しているが、同時にタイの文化を受け入れている。

Part 2: Newcomers – The Transition of Overseas Chinese Society

Chapter 4: The Policy of Overseas Chinese affairs after 1978

第4章は、1978年以降に展開される改革開放政策後の華僑問題に対する中国政府の政策をまとめている。文化大革命期では中国は海外との関係を基本的に断ち切り、華僑事務局も解散させられ、華僑の業務は完全に停滞し麻痺した状態であった。1978年12月に改革開放が国是とされ、政策の中心が経済分野に移り、中国の華僑政策も根本的に変化する。

しかし、中華民族と華僑を分けることは、中国の華僑問題において、非常に重要な争点であり、核心的な部分となった。華僑・華人の結節点として非常に重要なのは華僑・華人協会であり、それはほとんどが同郷の人たちを束ねる形で組織された。なお本章では、華僑・華人がその後の中国の投資と発展に貢献していった点を論じている。

Chapter 5: The Patterns of New Chinese Immigrants

第5章は、新移民の形態を論じている。第1節では中国人新移民の定義、形態や人口推移を述べている。第2節及び第3節では新移民の「押し出し要因」と「引き込み要因」をそれぞれ分析している。第4節では主題となるタイにおける新移民の状態、第5節では新移民と華僑・華人協会との関係を分析している。

1970年代以降、大規模な中国人の海外移住が行われ、国際的な移民の潮流の重要な一部となった。中国人新移民の第1のタイプは留学生である。台湾人留学生は、留学から移民への先例をつくった。第2のタイプは非熟練労働者である。彼らは主に家族再会を理由に定住資格を申請し、少数の人々は非合法的ルートを選んで海外に定住する。第3はビジネス移民で、投資移民、海外駐在員、各種業者などが含まれる。1990年代後半以降、中国本土から途上国へのビジネス移民の数は急増する。第4の移民は、契約に基づく労働力の輸出である。

中国からの新移民は、海外に出る動機、教育水準、経済力、職業構造、定住状況などが旧移民とは大きく異なっている。1950年以前の旧移民の多くが、教育水準は非常に低く、技術力もなく、故郷の方言しか話せなかったことで、特に老齢の旧移民は最初に到着した場所に定住し、同郷者を見つけ、互いに助け合いながら余生を過ごしていたと述べる。

東南アジアは中国の隣国であり、交通の便が良く、なによりも移民コストが非常に安い点の特徴とされる。新移民は、鄧小平時代から、現在の習近平が主張する「新時代」や「一帯一路」という市場経済の発展を促す政策で海外移民への道を促した。また、1980年代以降は海外留学を奨励するようになり、多くの公費留学生や私費留学生が、国民として初めてパスポートを取得し、家族も同伴留学という名目で一緒に海外に行くことになった。

東南アジアの華人社会には、同じ郷里や一族の者の面倒を見る責任と義務があるという。新移民も定住して自身の経済力がついたら、新たな移民を助ける義務があり、この伝統は東南アジアの華僑・華人協会の目的の一つであり、数百年の歴史を持ち今日まで続いているという。しかしながら、新移民の増加と結社数の増加から、伝統的な中国のコミュニティとは異なるあり方が次第に若い移民から提起されてきているという。

次に新移民の「引き込み要因」が論じられている。タイ政府は滞在ビザの発給を厳しく規制しているため、正式に滞在ビザを申請してもタイに移住する可能性は極めて低い。しかし、親戚や友人など現地の華人の助けを借りることも多く、現地で生計を立て、タイで永住権を取得することは難しくはないともいう。また、タイが新規移民の一大拠点となった理由の背景には、先進国へ行くことを熱望する新移民の通過点になっていることである。

2000年以降、中国とタイの二国間貿易は急速に拡大し、それに伴い中国人ビジネスマンの波も大きくなっている。中国政府の外国投資奨励政策に後押しされ、タイは中国の企業家にとって海外投資拠点の一つとなっている。観光ビザの取得も容易で中国からの観光客が殺到している一方で、タイ北部は中国からの物流拠点の一つになっている。また、筆者は、新移民を研究する場合、新移民と華僑・華人協会との直接的な接点、とりわけ協会を通じた商業的な結びつきを見逃してはならないと訴える。特に中国人にとって最も重要な華僑・華人協会は、地理、血統、民間宗教に基づく結びつきであるからだと指摘する。

中国はソフトパワーを駆使して、しばしば孔子学院とも連携しながら海外展開を行なっている。ピサヌロークの華人協会勤務者への聞き取り調査によると、この地域のすべての華人協会は、チェンマイの中国領事館と非常に密接な関係を持っており、国事に関わる行事を実施する場合には、領事館の同意を得なければならないという。例えば、台湾政策において

も中国政府の政策を遵守する。実際、ピサヌロークの合計27の華人系協会も共同で、反独立法の可決を支持する声明を発表しており、何よりも中国本土との最良の関係を維持する。

タイの富豪トップ10はすべて華人の一族で、中国人の家庭や社会で最も重要な社会的要因である「人脈」を基に現地の経済団体で高い地位に就いている。協会が旧華僑から新移民へと移行した後、その機能も根本的に変化し現地レベルから国際的レベルへ、単なる商業的な観点から政治と一定の関係や影響力を持つまでに拡大している。しかし、変わらないのは、「関係」が華僑・華人の不変的な要素であり、協会の機能や役割、担当する管理者がいかに変わろうとも、協会は人脈を作り、繋ぐための組織であることだ。このように、新移民が協会を利用して資本力を拡大する様子を観察することは、非常に興味深いと述べる。

Chapter 6: A Fieldwork Study of New Chinese Immigrants at Phitsanulok Province in Northeast Thailand

第6章は2節構成になっている。本論文の独創性を担保する事例研究として第1節に3項、第2節には4項を設けて、ピサヌローク県の地政学的位置を背景にした旧移民と新移民の有り様を様々な観点から比較している。

第1節では、3カ月間の現地調査地となったピサヌロークの地政学的立場を紹介する。ピサヌローク県は北タイ下部に位置する。ピサヌロークの北東にはラオスとの国境があり、西方にはミャンマーとの国境がある。タイは仏教国であるが、もし華人がキリスト教に改宗しても、仏教文化に完全に同化することなく、華人の独自性を維持することができるという。また、ピサヌロークは東西経済回廊と南北経済回廊の交差点にあり、大メコン圏(GMS)の基本構想を実現する上で重要な役割が期待されているという。

筆者の3カ月間に及ぶ現地調査では、自費・公費の中国人留学生を除くと、ピサヌロークに来た新しい中国人移民はすべて中国語ボランティアであったという。中国語教師はすべて女性であったが、彼女たちにとってタイは見知らぬ土地であり、中にはタイ語も話せず、タイ語の文字もわからないという語学教師もいた。新移民は、ビジネスで多くの利益と資金を得ることがどんな職業であれ、不変的な目標となっている。また、新移民は概して若く、筆者の知る限り、新移民の語学教師の最高年齢は42歳で、旧移民と新移民の平均年齢差は50歳前後であったと述べる。

インターネットやスマートフォンの普及で、新移民はインターネット上で小規模な商取引を行っている。また、スマートフォンの専用アプリにログインしてポイントを貯めることも、新移民の日常業務となっているという。アプリケーションの名前は「学而強国(がくしきょうこく)」と呼び、学習を通じて国力を強化するという意味を指す。このソフトは、登録者に本名と携帯電話番号の記入を求め、タイに教えに来る語学教師や、すべての公費留学生がこのアプリケーションを通じて、ポイントを獲得すると同時に自身と国内機関とのつながりを確保しているのだという。

ピサヌロークの中心部にある醒民学校(華人学校)の孔子教室は、旧移民と新移民が顔を

合わせ、交流する唯一の場所となっている。ほぼすべての中国人教師は、華僑事務局を通じてタイに派遣されてきた。採用された語学教師は「教育研修」を受けるが、研修の主な目的は、基礎的なタイ語の習得、歴史や政治状況などの理解で、さらに現場研修を通じてボランティア全員が互いを理解することである。語学教師への聞き取り調査から研修会最後には、参加者全員で「全宇宙に中国語が花として咲いている」という歌を合唱するとのことだ。

醒民学校敷地内の孔子教室で新移民と旧移民は同じ空間を共有し、中国語教師の仕事に就いている。また、醒民学校の中国語教師と孔子教室の中国語教師は同じ事務所におり、筆者の観察では新任教師（新移民）と古参教師（旧移民）のコミュニケーションは非常に頻繁であったと思えたが、両者のコミュニケーションは、あくまでも授業の目標達成のための仕事だけであり、空き時間や余暇の時間などではほとんどコミュニケーションがないということが判明したと述べる。

最後に新旧移民の投資とビジネスについて述べている。中国からの新移民の場合、まず中国語ができる先輩を見つけて助けを求めることになる。共通のビジネス・目的を持つことは、旧移民と新移民の両方を結びつける動機づけとなるからだ。一般的に華僑はそれぞれ特殊な社会・文化構造を持っており、それが華僑社会の団結力につながっている。概して中国社会では水平的な階級的連帯がほとんどなく、ほとんどの人がより高い地位を求める垂直的な階級連帯であるという。また、たとえコミュニケーション手段として言語（中国語）が社会的に標準化されたとしてもピサヌロークの華人社会の事例を見る限り、ドイツの国民統合論はあまり機能しなかったのではないかと筆者は指摘する。

Chapter 7: The “Borderless Integration” between Newcomers and Old-timers

第7章は筆者が本論文で最も独創性を発揮した「ボーダレス統合」の議論である。中国のソフトパワーを海外に拡大するために、新旧移民の結束がこれまで以上に重要となってくる。なぜならば、ソフトパワーは海外での国のイメージを向上させるだけでなく、他国との交渉や競争のための切り札になるからだ。「中国化」の教義と政策は、習近平の「新時代」のビジョンの一部であるが、中国化とは中国語、中国の文化、教育、イデオロギー、倫理を非中国語圏に持ち込み、現地の人々が中国の持つすべてを徐々に理解できるようにすることを目指したものである。

しかし、新旧移民の間には、まだまだ大きな相違や不一致がある。言語の違いだけでなく、行動様式や倫理観も大きく異なっているからだ。したがって、両者を結びつけるには、外部の強力な力が必要であった。前章で論じてきたように、中国政府は清朝以来、様々な華僑政策を実施し、華僑を積極的に取り込み、今日まで中国の国内建設に貢献させてきたことも述べてきた通りである。

本章では、ピサヌロークを事例に、中国の華僑政策の一部を分析・観察し、これらの政策がどのように新旧移民を結びつけ、ソフトパワーを高めてきたのかを考察している。また、3カ月間の調査で、旧移民がいかにボーダレス統合に直面しながらも、自分たちの利益を最

大化するために中国政府から中立の立場をとり、同時にすべての当事者の利益を侵害せず、自らも損害を被らないという、非常に興味深い行動選択をとっていることを述べた。

「ボーダレス統合」という概念は、筆者自身の造語である。この概念は、国民統合の定義から示唆を得たものである。ボーダレス統合とは、国民統合における「ナショナル」と「インテグレーション」を分離させたものである。統合の概念は、国民だけにとどまらず、国民以外の人々にも影響を及ぼす可能性がある。「ボーダーレス」とは柔軟な市民権の行使から発揮されたものを指していると述べる。

ボーダーレス概念を考える上で役立つのがアンダーソンの「想像の共同体」である。ボーダーレス概念は、国のソフトパワー強化の目的に基づく。ナイによると国家のソフトパワーは主に、文化、政治的価値観、外交政策の3つの資源に依拠する。筆者は、ボーダーレス統合が、政治的に分断された国境や個人的な観点からは国籍を破ることを意味すると述べる。つまり、ボーダーレス化を前提に、自国のソフトパワーを高めることで、グローバルに同一民族の統合が行われることになるかと指摘する。

それでは「ボーダレス統合」はどのように構築するのかである。筆者は、文化の構築、ソーシャルメディア、言語教育の3つの柱を重視する。第1の柱は、中国人や中国社会にとって、最も基本的な柱となるのは儒教である。儒教は中国人の道德観、世界観、価値観、善悪観の標準的な基準を設定するものでもある。世界各地の有名大学に孔子学院が設立されるなど、海外での中国の国家イメージの宣伝にも利用されている。

第2の柱は、スマートフォンの中で機能するソーシャルメディアが、特にラジオやテレビなど従来の情報収集メディアを既に手放した若い世代にとって、最も支配的なコミュニケーション手段の一つとなっていることだ。中国の国内メディアが、新旧移民を含む海外の中国人一人ひとりに国家の思想を広め、新移民のコミュニティに影響を与えると同時に、旧移民にとっては「母国」を再定義することで国境概念を作り替えようとしていると述べる。

第3の柱は、言語が最も重要なコミュニケーション手段として国民統合に影響を及ぼすことである。どんなに民族的背景が異なっても、同じ言葉を話すことができれば、統合の成功と可能性は非常に高くなる。2019年現在ピサヌロックとその周辺6県には124名もの中国語教師が存在する。醒民学校でも新移民はタイ語を話せず、旧移民とのコミュニケーションはほとんど標準中国語で行われている。こうした状況は旧移民のタイへの同化プロセスを阻害する一方で、中国本土から持ち込んだ中国人アイデンティティを維持し続けることを促していると言えよう。

筆者はフィールド調査を踏まえた本章のまとめとして次のように述べる。ボーダーレス統合と新移民の出現の中で、特に微妙な政治的問題を扱うとき、いかにして華人社会が独立・中立を保つのが、醒民学校の課題であったという。学校紹介文に、その使命と核心的な価値観は世界の海外華僑の団結にあると記載されている。しかし、この核となる価値観も新移民の到来によって再考を余儀なくされているのではないかと述べる。

つまり、現地の人々に中国語（北京語）を教えること、儒教を継承すること、中国のソフ

トパワーを強化することなどである。新移民の言葉を借りれば、真の儒教文明をタイにもたらし、中国の新世代の活力と展望を示すことである。もちろん、これらは中国の国策と密接に関係している。しかし、これは醒民学校と高齢者華人の目的とは相反するものである。

旧移民や醒民学校側は、国内外のすべての中国人をタイ社会へと統合することを考えるが、新移民の側では、中国との国境なき統合を考えている。簡潔に言えば、一方は国内外の中国人を束ねることであり、他方は新旧移民のボーダレスな統合を実現することである。統合という結果は同じように見えるが、その過程や方法、結果までもが全く違うのである。

また、香港、台湾、大陸との関係など政治的に微妙な話題は避けて通れない。醒民学校の校則に「政治に関わる人を除き、適切な範囲と文脈で会員を助ける」という文言が記載されているが、これはある種の政治的野心を持った中国人は、醒民学校や他の華人社会から排除されるということを示したものである。なぜなら、タイの老齡華人は苦難を味わい、教訓を学び、政治による犠牲を避けるためにタイ政府と協力する方法を知っているからだ。しかしながら、現在新移民の登場とともに、政治的中立をいかに保つことができるのかという新たな試練を迎えている。このような状況の中で、筆者は醒民学校設立の歴史の中に、政治的中立を保つための彼らの行動様式が見出されると述べる。

終章

終章では論文全体を通じて、中国人移民（華僑）の歴史を振り返っている。特に、中華人民共和国建国後から現在に至るまで、華僑の子孫がビジネス、投資、政治のために祖国への回帰と貢献が可能となるように、様々な政策が実施されてきたことを述べている。

また、改めて筆者の唱える「ボーダレス統合」とは何かを論じている。この概念は、特にピサヌロークでのフィールドワークを背景にして生まれたものである。ドイツの「国民統合論」から学び、コミュニケーション・ツールである同じ言語を重視する。つまり、人種や肌の色、文化的背景が異なっても、同じ言語を話すのであれば、調和した共同体を形成することができるという考え方である。

筆者の研究の焦点は、新旧中国人移民の関係であり、これは従来の国民国家形成における国民統合論とは視点が異なるものである。新旧中国人移民の統合は、国益、政治経済的利益を背景にした中国の外交政策・戦略に基づいて行われる半強制的な統合のようなものである。したがって、伝統的な意味での国民統合論や筆者の唱えるボーダレス統合とは異質なものであると指摘する。新旧移民の統合は、互いの言語が通じないため、本来は疎遠であり、実は対立しているはずであるが、いくつかの政治的、外交的な要因によって、この2つの集団は迅速に互いのコミュニケーションをとり、相互依存するようになった。他方で、インターネットの普及などによって国境の概念が曖昧になり、新旧移民の間には国境線がなくなりつつあると考える。

なお、筆者は「東南アジアの十字路」としてピサヌロークの重要性は今後とも変わらないと指摘する。中国政府が語学ボランティアを派遣する理由がそこにある。彼らは高度な教育

レベルを持つ新しい移民の代表であり、また彼らのタイでの生活基盤は、中国の対外政策に直結しているからだ。

中国、東南アジア、ヨーロッパ、北米、南米、東京のどこでも移民を見ることができる。日本自体も徐々に国際的な移民大国になっていくものと思われる。その意味で、筆者の中国人移民研究は日本の政策立案者に一定の示唆を供与できるものと思われる。移民本人だけでなく日本の地域住民にとっても調和のとれた、統合された、安全で平和な社会をいかに創造するのか。筆者は本論文を通じて移民を含むすべての人々が日本という場で将来にわたって平和に暮らせるような社会統合の必要性を訴えている。

IV. 公聴会での主なコメント・質疑と応答 (2023年1月19日、16時から17時半に実施)

○コメント・質問 ●回答

○博士論文最終報告会でのコメントを踏まえて、論文の内容を改善し、タイ華僑・華人社会の研究に新たな貢献がなされたと思う。ただその一方で、華僑・華人社会研究の先行研究をさらに読み込めば、趙さんの研究はいつそう深められたのではないか。

●最終報告会前から中国に戻らざるをえない状況にあり、コロナでのロックダウンなどで自由に身動きが取れなく、かつネット状況も悪かったために、十分に最終報告会后に指摘された先行研究を読み込めなかった点が残念であった。今後の研究課題にしたい。

○筆者が主張する“Borderless Integration”は、アソシエーション(会館)、経済投資、ネットワーク(関係)に依拠しているが、この統合が指す中身は新旧移民の関係なのか、タイ国への統合なのか。この統合が結果として何をもたらすのか。

●本論文では新旧移民の関係を考察する意味でつくった筆者の造語である。タイのピサヌロークで新旧移民はどのような関係を構築しているのか。結果的に、両者は同じ出自であってもすでに広い意味でコミュニケーションは断絶している。また、特にピサヌロークでは明確な産業が発展していないこともあり、会館と関係は存在するが、経済投資に関しては、“Borderless Integration”への影響は大きいとは言えない。

○“Borderless Integration”において、新旧移民の立場はどのように異なるのか、あるいは同じなのか。

●新移民は中国政府の政策に基づき派遣されている。ピサヌロークで目立った産業がなく孔子学院で中国語を教える教師が派遣されているだけである。彼らの生活は政府によって担保されており、自らの生活を築いてきた旧移民とは異なる。新移民はいずれ中国に戻る立場の人間であり、彼らは華僑資本を中国へ呼び込む役割を担っている。

○新旧移民を対比する上で、最終報告会時に比べ関係(ネットワーク)、アソシエーション(会館)を踏まえた“Borderless Integration”を論文の核に据えて改善されたと思う。ただ最後の終章において、増大する中国人移民に直面する日本社会にも一定の示唆があると提言しているが、具体的な内容が欠如している。今後書籍化する時点で言及すべき

点である。

●タイにおける新旧移民の研究を通じて、ぜひ日本社会へ向けた内容を深めていきたい。

○なぜ“Borderless Integration”、つまり依拠するカール・ドイッチの国民統合論がピサヌロックで進まないのか。

●旧移民はすでにタイ国籍を有し、タイ人としてのアイデンティティを有するが、新移民は一時的な中国政府からの派遣者なので、たとえ中国語という言語でのコミュニケーションが取れても国籍というアイデンティティが異なっている点で両者の立場は違う。

○1975年のタイ政府による台湾断行は華人の感情的変化をもたらしたのか。

●残念ながらその件に関しては、ピサヌロックの老齡華人社会への聞き取り調査ができなかった。ただ、旧移民（老齡華人）が政治的中立性を堅持していることは論文で言及している。直接的な聞き取り調査は今後の課題にしたい。

V. 本論文の評価と審査内容

(1) 着眼点、方法、内容、結論等におけるアイデア、独創性：

本論文は、筆者自身が学士を米国で取得し、修士を香港で取得し、日本で博士課程を送るという多面的なアイデンティティを有することに由来する。自ら留学生であると同時に新移民として複数の国で生活を送り、最も多様性を有するタイでの研究生活が本論文の研究課テーマとなった。研究方法は、過去から現在に至る日本語、英語、中国語による豊富な華僑・華人研究に依拠し、文献研究と同時に北タイ下部のピサヌロックでの3カ月間の現地での研究期間と調査に基づいている。内容的には、中国人旧移民（華僑・華人）と新移民（労働移民）の関係をカール・W・ドイッチェの国民統合論からの示唆を踏まえて、“Borderless Integration”という筆者独自の概念を展開している。その観点からも本論文の独創性は担保されている。

(2) 論文のテーマ設定の妥当性、重要性：

本論文は中国人旧移民である華僑の歴史を遡る。また、すでにタイ国籍を有する意味で華僑から華人（本論文では“old-timers”）と、中国の経済発展や外交政策に基づいて移動する新移民（“Newcomers”）をテーマに、両者の関係を“Borderless Integration”という筆者の造語で論じている。なお、論文のテーマ設定においては重要なキーワードを含むと同時に内容的にも妥当性を有している。

(3) テーマに応じた論文構成の妥当性：

まず第一部では、華僑の歴史を辿り、東南アジア地域、さらには事例研究となるピサヌロックに定住し、タイ人の国籍を有する華人（旧移民）を理解し、次に第二部ではむしろ改革開放政策導入後の新しい中国人移民に焦点を当てている。また、新旧移民を踏まえて、ピサヌロックでの事例研究、さらには筆者の結論となる新たな概念“Borderless Integration”

を展開する論文構成となっている点で、妥当性を有している。

(4) 先行研究のサーベイをふまえた専門分野における貢献度：

すでに述べたが華僑・華人研究は豊富であり、筆者は日本語、英語、中国語の先行研究をもとにまずは研究を開始している。文献研究を踏まえてフィールドワークを行い、筆者自身の新たな概念を提起した点で、中国人移民研究に一定の示唆を与えるものと評価できる。

(5) データや資料に裏付けられた実証性：

本論文では先行研究から得た知識や実際の現地調査に基づく聞き取り調査から得られた豊富な図表が記載されている。特に3カ月間ではあったが、精力的な聞き取り調査を実施しており、実証性は高いと考える。

(6) 論旨展開における論証性、説得力：

論文構成からも言えるが、華僑の歴史を踏まえ、特に中国の改革開放後の経済発展に伴う新たな労働移民や対外政策に基づく派遣労働者などの実態を明確に示している点で、論旨展開は説得力を持っていると判断される。

(7) 専門用語や概念の使い方における正確さ、妥当性、充分性：

本論文では移民研究の学術的な分析枠組みとして、Everett S. Lee の「Pulling-Pushing Theory」、Joseph S. Nye の「Soft Power」、Benedict O' G. Anderson の「Imagined Community」、Karl W. Deutsch の「National Integration」などに依拠している。これら主要な用語や概念の使い方に問題はないと考える。

(8) 引用の仕方、注の付け方、資料の利用の仕方、文献リストの作り方における正確さ、妥当性、充分性：

引用、注、資料利用方法、文献リスト作成などは事前に指導しており、問題はない。

(9) 社会科学研究科の独自性から要請される学際性、実践性：

本論文は、華僑・華人研究の歴史的側面、移民という人の国際移動に関する国際社会学、タイに関する地域研究、分析枠組みとしての国際関係論研究など、論文のテーマから学際性を当初から有している。また、現地調査という実践性も兼ね備えた研究となっている。

(10) 論文全体としての卓越性：

本論文はすでに述べたように、筆者自身は中国人である一方で、留学生として米国、香港、日本という様々な国・地域での体験が問題意識としてある。また、これらの経験は論

文執筆においても有益であったと考える。何よりも華僑・華人、さらには経済発展を背景にした労働者移民、対外政策に基づく派遣などが本論文では議論されている。もちろん、広く移民、あるいは人の国際移動とは何かを理解する上でも一定の示唆が得られる。筆者が終章で述べているように、増大する中国人移民を日本は今後どのように対応するのかなど、当該政策担当者のみならず、日本人全体にとっても有益な論文であり、本論文の卓越性を担保するものとする。

なお、本論文に残された課題としていくつか挙げておきたい。筆者自身が指摘するように、第1にタイのフィールドワークにおける聞き取り調査において、筆者自身のタイ語能力の限界から通訳を介さざるを得なかったことである。第2にコロナ禍で現地への再調査ができなかったことである。フェイスブック等での代替を試みたが十分ではなかったと述べている。併せて、中国の厳しいコロナ政策の影響を受けたことである。特に後者の理由で、博士論文最終報告会で指摘された点を確認できなかったことである。これらの点は今後の研究課題として残されているが、しかしながら本論文全体の評価に大きな影響を与えるものとは考えられないと判断する。

【審査委員会の結論】

以上の所見と評価、公聴会の質疑応答に鑑みて、本論文審査委員会は全員一致で本論文が「博士（社会科学）」の学位を受けるに値するものと認め、ここに推薦する次第である。

2023年1月19日

主査審査委員	早稲田大学社会科学総合学術院・教授	山田満	博士（政治学）
審査委員	早稲田大学社会科学総合学術院・教授	堀芳枝	博士（国際関係論）
審査委員	早稲田大学社会科学総合学術院・准教授	奥迫元	博士（政治学）
審査委員	タイ国立ナレースワン大学社会科学部助教授	高橋勝幸	博士（学術）